第12講

社会科学系(5)

過疎地域が抱える問題

チャプター1

資料読解

生徒メモ欄

【課題文1】

1　日本が人口減少社会に突入していることは，すでに多くの方がご存じだと思いますが，地方は，これまで長い間，人口減少に直面してきました。中には20年以上も前から人口が減り続けている地方もあるのです。

2　注目したいのは，こうして人口減少が続いてきた地域では，住民の意識の後退やあきらめなどが報告されるようになっていることです。「心」の問題です。

3　農山村問題の第一人者である明治大学の小田切徳美教授は，人・土地・むらという3つの空洞化が進んだ結果，地域住民がそこに住み続ける意味や誇りを見失いつつある「誇りの空洞化」という，本質的な空洞化がその深奥(しんおう)で進んでいると述べています。

4　地方にとって，消滅とまで言われるほど人が減り，何かしようと思っても力が足りないこと，その結果，住んでいる人の心の中にあきらめが大きくなっていること。地方は，体力面，精神面，ともに危機に直面していると言うことができます。

5　そんな危機に直面する地方に，新しい潮流が生まれています。都市の若い世代を中心とした，地方への関心の高まりが「田園回帰」と呼ばれ，注目されているのです。

6　過疎地域を対象にした，総務省の「田園回帰」に関する調査研究会の都市住民に対するアンケートでも，農山漁村地域に移住してみたいと答えたのは全体の30.6％。20代と30代が多く，中でも最も高い20代男性では43.8％でした。

7　では，彼らは地方に何を求めているのでしょうか。ヒントになるのが，雑誌『ソトコト』の指出(さしで)一正編集長が，若い世

代の特徴として表現する「ソーシャル」です。

8 ソーシャルとは，社会や地域，環境をよりよくしていこうという行動やしくみを広く意味しており，時代のキーワードだと考えています。個人の幸せだけではなく，地域の幸せも考える，公共的，利他的なあり方のことだと考えていただけると良いと思います。

9 この背景には，2008年のリーマンショックや，2011年の東日本大震災の影響が大きいと指出編集長は見ています。人々の価値観が大きく揺さぶられたことで「1つのものに頼りすぎない生き方」「バランスのとりやすい豊かな暮らし」といった新しい価値観の発見につながり，さらに，いまの社会システムへの疑問，その先に未来や自分の幸せはあるのかを考えさせられ，個人の幸せのみではなく，社会や地域の幸せを考えるあり方につながっていると。

10 これは，過去とは明らかに違っています。

11 過去にも地方への関心の高まりが注目されたことはありました。都市へと移り住んだ出身者が地方へと戻るUターンが1970年代に注目され，続いて1980年代後半になると，出身とは関係のない土地に移住するIターンが登場しました。しかし，Uターンの理由は家族の事情といった消極的な理由が中心で，Iターンものんびりとした田舎暮らしに憧れを持つといった，どちらかと言えばこだわりのライフスタイルやイデオロギー(注1)の実現という側面が強く，地域に関わりたいという人たちは限定的だったとされています。

12 しかし，ソーシャルないまの若い世代にとって，地方とは単に住むための場所，自分だけの暮らしの場所なのではありません。自分も地域もよりよくなっていくために，自分が関わりたい，役に立ちたいと感じる場所なのです。

13 彼らにとって地方は「チャンスがたくさんあり，人が成長できる場所」と映ってさえいるのです。

14 では，新しい潮流を，地方の側はどう生かし，力にしているのでしょうか。

15 これまでは大きく2つの戦略があると考えられてきました。①移住・定住，②交流・観光です。それぞれ詳しく見ていきましょう。

16 まず思いつくのは移住・定住だと思います。地方に移住してきて，ずっと住み続けてもらったらいい。実際に多くの自治体が移住・定住対策に懸命になっていますよね。

17 でも，想像してみてほしいと思います。移住というのは，住まいを移すと書きますが，住まいはもちろん，仕事や友

生徒メモ欄

生徒メモ欄

人関係など，自分の毎日の暮らしにまつわるほとんどのことが変化します。いくら想いがあっても，簡単には決断や実行ができません。人生の一大事です。

18　一言で言うと，移住は“ハードルが高い”のです。

19　この他にもハードルを上げている要因があります。地域の姿勢です。移住してきた人に対して，すぐに「いつまで住むのか」と，定住の覚悟を求める場面をよく見てきました。引っ越してきたばかりで，そんなことは正直，わからないのではないでしょうか。気持ちはあっても，長い人生，約束はできない。

20　でも，そういう地域の姿勢が「定住しなくては地域に関わる資格がない」というメッセージとなって伝わります。

21　その結果，何が起こっているのかというと，地域に移住したり，関わったりすることのハードルが異常に上がり，「定住しなくては関われない」となり，多くの人は「すぐに移住，そして定住までは決断できないから，やっぱり関わることもやめておこう」という，オールオアナッシング(注2)になるということです。

22　地域に移住したり，関わったりする選択肢が，入り口から閉ざされるのです。人が足りない，来てほしいといいながら，結局，排除しているのは地域側という側面もあるのです。

23　では，もう1つの交流・観光を見てみましょう。交流とは短期的に滞在することを一般的に指しており，都市農村交流など，都市住民が地域を訪れ，地域への理解を深めることができるとされています。

24　移住に比べればぐっと取り組みやすい，つまり，ハードルが低くはあります。しかし，一方で，例えばイベント交流などが，住民の無償労働によって成り立つ構図になりやすく，「交流疲れ」という現象が報告されているのです。

25　先ほど登場した明治大学の小田切徳美教授は，交流疲れ現象について，交流当初は取り組みに熱心に参加できるが，2～3年後には「都市の者に頭を下げてサービスをして，地域に何が残ったのだろう」という疑問とともに，参加者の疲れが増す現象であるとして，最終的には活動が崩壊した例も少なくないとしています。

26　また，短期的な滞在の形には，旅人として地域を訪れる観光もあります。しかし，こちらは，ソーシャルな若い世代からみると，少しニーズとはずれているのです。単に観光地に足を運んで，消費することよりも，これまでに紹介してきたように，地域に関わりたい，役に立ちたいと考えているから

です。

27　しかし，観光では，地域の課題を見たり，その解決に関わったりするということは，想定されていません。実際に「旅や観光では物足りない。もっと地域に関わりたい」という若い世代の声を聞いたことがあります。

28　交流・観光も，新しい潮流を力として生かすことが十分にできていない。構図としては移住・定住と同じだと考えられます。

29　新しい潮流を，地方の側は，移住・定住でも，交流・観光でも，生かし切れていない。力にすることができていないのです。ただでさえ人が減る中で，もったいないと思いませんか？

30　移住・定住でも交流・観光でもない，地方と都市の若い世代がウィンウィンの関係となる第三の道である新しい考え方や仕組みはないだろうか ——。

31　ここで，関係人口の登場です！

32　前述の指出編集長は，これまでは地方を元気にする方法として，移住者が増えて人口の増加を目指すことか，観光客がたくさん訪れることによって経済効果を上げることか，が主流であり，戦略としては，住んでいる人を増やす「定住人口」の増加と，地域外から旅行や短期滞在で訪れる人を増やす「交流人口」の増加，どちらに政策の重きを置くかが行政の視点だったとしています。

33　こうした中で，最近生まれたのが，定住人口と交流人口のどちらにも当てはまらない「地域に関わってくれる人口」である「関係人口」であり，この関係人口が地方の未来を開くキーワードであると述べています。

34　そして，大きなポイントの1つとして，関係する地域というのは複数持つことができる，ということも提案しています。

35　都市の人から見れば，関係する地域は，1つではなくてもいいし，複数持つことができる。また，地方の側から見ても，定住人口のように奪い合わなくてもいい。どの自治体だって，関係人口を増やすことができます。

36　人口減少時代の不毛な奪い合いを解決し，そして都市の人も地方も救うことにつながるはずです。

37　小田切教授は，実態を見れば，人々の農村への関わりは段階的であるとして，例えば，①地域の特産品購入→②地域への寄付→③頻繁な訪問（リピーター）→④地域でのボランティア活動→⑤準定住（年間のうち一定期間住む，二地域居住）→⑥移住・定住という，いわば「関わりの段階」があり，関係は「無関心ー移住」という両極端ばかりではなく，濃淡があると指摘しています。

生徒メモ欄

生徒メモ欄

㊳　やはりグラデーションですよね。購入，寄付，頻繁な訪問，ボランティア活動，準定住という5つの関わり方が出てきました。

㊴　これまで交流と定住という考え方には，その地域の滞在期間という，時間軸に基づいた評価しか存在しなかったのではないでしょうか。

㊵　住む＝滞在時間が長いことを評価する。それこそが「いつまで住むつもりがあるんだ」という問いや「住んでいないと関わる資格がない」とでも言わんばかりの態度につながる根本であるように感じます。

㊶　住む＝滞在時間ではない評価の基準こそが，関係人口には必要なのです。住まなくても，つまり，滞在時間が短くても，地域の役に立つ，関わる，という形なのですから。その評価軸は何になるのか。

㊷　私は現時点では，社会的インパクトという評価軸を加えるのはどうかと考えています。どれだけ長く過ごすかではなく，どんな社会的価値や影響を地域にもたらしたか。

㊸　社会的インパクトというものを，さらに掘り下げていくと，ヒト・モノ・カネとよく言われる3要素に，アイデアを加えたものになるのではないかと考えています。これらが地域にもたらされることで，地域の力になるという仮説です。

㊹　これまでの定住も交流も，社会的インパクトは関係なく，どれだけ地域に滞在したかという時間軸の評価の指標で，見られていたと思います。

㊺　一方，関係人口は，滞在時間にかかわらず，たとえ離れていても地域のファンを増やしたり，地域の特産品を売ったり，投資を呼び込んだり，新しいアイデアをもたらしたりする存在であり，その結果，地域にインパクトを与え，役に立つことにつながると言えます。

【課題文2】

1　都会の若者らがワゴン車に乗って全国各地を周遊し，無償で滞在しながら住民と交流する。福井県南越前町が2015年から続ける「ラウンドトリップ」は，自治体の事業としては型破りだ。1〜2週間の〈旅〉のスタートは必ず南越前と決まっているが，近くは富山や岐阜，遠くは徳島や長崎まで足を延ばす。滞在先は，18年までに全国24か所にも上る。

2　旅先の多くは，Iターン者ら地域おこし協力隊員(注3)がおり，受け入れに理解がある地域だ。参加者は，農業や掃除など集落の作業を手伝い，対価として寝床や食事を提供しても

らう。

3 どうして町の予算で，参加者をわざわざ県外に連れ出すのか。町観光まちづくり課のAさん（31）は「南越前町だけだと，移住へのプレッシャーと受け取られる。それより，様々な地域を体験してもらい，地方での暮らしに対するハードルを下げたい」と説明する。

4 狙いは，都市や地方など，複数に生活のベースを持つ「多拠点居住」に関心を持ってもらうこと。将来，参加者が選ぶ拠点の一つに，南越前町が入っていればいいという考え方だ。

5 それでは，拠点同士で，同じ人材の奪い合いにならないのだろうか。Aさんはこう答える。「南越前町でも，田植えや収穫，雪囲いの設置などに人手が必要な時期は限られている。地域の事情に応じて人材が移動すれば，多くの地域が救われるのではないか」。人口減社会の下，複数の地域で人材を共有するという理念が，根底にある。

6 都会から地方へと人の流れを創り出す——。町は「流動創生」と銘(めい)打ち，15年から様々な事業を始めた。町内には当初，効果に疑問を持つ声もあったが，参加者の中から，町に滞在して事業に携わる人も出てきた。

7 17年のラウンドトリップに参加した福井市出身のBさん（35）は，翌年から，町の地域おこし協力隊員となった。ビニールハウスで野菜を収穫したり，田植えを手伝ったりするたびに，「住民と距離が縮まっていく感覚が楽しい」と話す。町から流動創生事業を運営する仕事も任され，受け入れ側の苦労も知った。「参加者と住民が信頼関係を築くには，時間も手間もかかる。だから，私が間に立って両者をつながないと」

8 町は，最大で数週間滞在し，農作業やイベントを手伝う「ストップオーバー」事業で200人以上受け入れた。東京都の会社員Cさん（27）は昨年5月に参加して以来，10回以上足を運んでいる。「特別扱いをされないのでかえって居心地が良く，もう一つの家ができたような気分になった」と明かす。

9 受け入れてきた古木地区の農家Dさん（81）は，Bさんらから愛称で親しまれ，交流が生きがいになった。「都会で人気のある野菜を教えてもらっている。若い人のアイデアが，私が生きる肥料になってるんです」と目を細める。

10 ただ，こうした変化も，5年がかりでようやく出始めたところだ。Aさんは「この事業は，数値ですぐに成果が見えるものではない。でも続けていけば，いつか住民主体で関係人

生徒メモ欄

生徒メモ欄

口づくりをする時がくる」と信じている。

(【課題文1】　田中輝美『関係人口をつくる：定住でも交流でもないローカルイノベーション』による。ただし，出題に際して原文の一部を改めた。)
(【課題文2】 (複数の地域で人材共有)[下](地域支える関係人口　読売新聞2019年5月27日 ただし，出題に際して原文の一部を改めた。)

(注1)　イデオロギー：思想の体系・傾向，ものの考え方。
(注2)　オールオアナッシング：有りか無しかという選択。
(注3)　地域おこし協力隊(員)：都市地域の住民が，過疎地域等の市町村に住民票を異動し，1年以上，地域の農林漁業支援・住民の生活支援などを行いつつ，定住者となることを目指す取り組み。

(北九州市立大学　法学部　2021)

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター2

問題およびヒント

問題1　【課題文1】を読んで，筆者がいう，農山村などの地方をめぐる「新しい潮流」の内容とその生かし方についてまとめなさい。（400字以内）（120点）

問題2　【課題文1】と【課題文2】を参考にし，「関係人口」の可能性と限界に触れた上で，農山村などの地方が関係人口に期待することに対して，賛成・反対の立場を示し，あなたの意見を述べなさい。（400字以内）（180点）

生徒メモ欄

教員記入欄

解答案をつくってみよう

【問題1】

100

200

300

400

（　　　　字）

生徒メモ欄

教員記入欄

解答案をつくってみよう

【問題2】

100

200

300

400

（　　　　字）

生徒メモ欄

教員記入欄

自己評価表

答案が完成したら、以下の表を用いて自己評価をしてみましょう。
5段階評価の基準は、巻末のルーブリックを参照してください。

設問の理解	出題の意図および背景の理解	S	A	B	C	F
意見(主張)	設問と意見との関係	S	A	B	C	F
	独自性・独創性・発展性	S	A	B	C	F
理由(根拠)	事実に基づいた論証	S	A	B	C	F
	重要性・問題性	S	A	B	C	F
論理性・簡潔性	適切な論理展開	S	A	B	C	F
	簡潔な記述	S	A	B	C	F
表記・表現	誤字・脱字	S	A	B	C	F
	段落の設定	S	A	B	C	F
	制限字数	S	A	B	C	F
	文体の統一	S	A	B	C	F
	表現技法	S	A	B	C	F

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター3

答案例①

【問題1】

　都市部の若い世代で地方への関心が高まっており、総務省のアンケート回答者の約三割が農山漁村地域に移住してみたいという。指出氏はリーマンショックや東日本大震災の影響で人々の価値観が変化したことが背景にあると分析し、彼らには個人の幸せだけではなく、地域や社会の幸せを考えてそれらや環境をよりよくしていこうという、「ソーシャル」な特徴があるという。筆者はソーシャルな世代が自分も地域もよりよくなっていくために地域に関わりたい、役に立ちたいと感じていることを「新しい潮流」と考えている。しかし、これまでの移住・定住や交流・観光型の関わり方では地域の役に立ちたいという新しい潮流の力を生かしきれているとは言い難く、筆者は現地にいなくても特産品販売や新しいアイデア等で貢献できる関係人口という関わり方を提案している。そのことは複数の地域に関係できるという利点のほか、人的資材の奪い合いを防ぐ効果も持つという。

(396字)

生徒メモ欄

教員記入欄

答案例①

【問題2】

　居住地に関わらず地域支援ができること、多様な支援方法があることで容易に地域に関われることは関係人口の大きな可能性である一方、定住者が増加しなければ子どもが増えず、過疎化が止まらないことは関係人口の限界だと考えられる。また、関係人口の一つであろうふるさと納税では特定の地域への集中が起きるなど、支援を受けやすい地域と受けにくい地域との格差が拡大する懸念もある。しかし、ある地域に関心や親しみを持つことが定住への第一歩であるならば、特産品購入や短期滞在ボランティアなどで、気軽に地域に関わる機会が増えることは評価されるべきであり、関係人口という支援方法には賛成である。地方は必要な時期にボランティアに来てほしいことを広報しても良いのではないだろうか。田植えや雪下ろしなどの特定時期に若い滞在ボランティアがいると高齢者には助かるだろう。地域住民でない人との交流によって閉塞感が薄まる効果も期待される。

(398字)

生徒メモ欄

教員記入欄

評価してみよう

答案例①を、以下の表を用いて評価してみましょう。
5段階評価の基準は、巻末のルーブリックを参照してください。

設問の理解	出題の意図および背景の理解	S A B C F
意見（主張）	設問と意見との関係	S A B C F
	独自性・独創性・発展性	S A B C F
理由（根拠）	事実に基づいた論証	S A B C F
	重要性・問題性	S A B C F
論理性・簡潔性	適切な論理展開	S A B C F
	簡潔な記述	S A B C F
表記・表現	誤字・脱字	S A B C F
	段落の設定	S A B C F
	制限字数	S A B C F
	文体の統一	S A B C F
	表現技法	S A B C F

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター4

答案例②

【問題1】

　若い世代を中心に地方への関心が高まっている。このことは、都市部に住む地方出身者が家族の事情で戻ったり、田舎生活への憧れといった理由で移住する動きであった過去のものとは異なる背景を持つ。不景気や大きな天災を経験したことで価値観を見直し、個人の幸せだけではなく、地域の幸せを考え、自分も地域もより良くなっていくために、地方と積極的に関わりたいとの欲求からきているものである。

　人口減少に悩む地方がこの潮流を生かすには、まず地域に関わってくれる人口「関係人口」を増やすことだ。そして、関心の濃淡や関わり方の段階を考慮し、地域に社会的価値や影響をもたらしやすい仕組みを作ることが鍵になると考える。地域での滞在時間に関わらず、さらに言えば離れていても、特産品を売ったり、投資を呼び込んだり、新しいアイデアをもたらすことで、地域のファンを増やし、地域に役立つものになるはずである。

(399字)

生徒メモ欄

教員記入欄

答案例②

【問題2】

　「関係人口」の存在は、地方と都市の若い世代双方の利害が一致する形といえる。移住・定住が持っていたハードルの高さがなく、交流で地域が疲弊したり、若者をニーズとずれた観光客にしてしまうわけでもない。地方の新たな価値が掘り起こされ、地域住民が見失いつつある、そこに住み続ける意味や誇りを取り戻すきっかけにもなり得ると考える。

　しかし、地方が彼らに期待する、言い換えれば、頼ることには反対である。なぜなら、若い世代が関心を持つ、田植えや収穫をする農業生活、雪囲いなどの季節作業、地方ならではの特産品、これらはそこに住み続ける住民がいてこそ継続的に提供されるものであり、いかに地域の評価が高まったとしても、世代をつなぎ、そこで生活する人が残らない限り、永続的ではないからだ。結局「関係人口」は時限的な存在なのだ。やはり、地方にとっては「関係人口」が定住人口になる仕掛けを積極的に行うことが重要だと考える。

(396字)

生徒メモ欄

教員記入欄

評価してみよう

答案例②を、以下の表を用いて評価してみましょう。
5段階評価の基準は、巻末のルーブリックを参照してください。

設問の理解	出題の意図および背景の理解	S A B C F
意見(主張)	設問と意見との関係	S A B C F
	独自性・独創性・発展性	S A B C F
理由(根拠)	事実に基づいた論証	S A B C F
	重要性・問題性	S A B C F
論理性・簡潔性	適切な論理展開	S A B C F
	簡潔な記述	S A B C F
表記・表現	誤字・脱字	S A B C F
	段落の設定	S A B C F
	制限字数	S A B C F
	文体の統一	S A B C F
	表現技法	S A B C F

生徒メモ欄

教員記入欄

チャプター5

レベルアップのための読書案内

本講で学んだことを元に、さらにブラッシュアップするための
おすすめの書籍情報を知り、その書籍の読み方を学びましょう。

講義メモ欄

生徒メモ欄

教員記入欄